



僕らはテクノロジーとともに身体の補完を 超えて拡張してゆく

■ 武藤 将胤



皆さんは昨今のテクノロジーの進化をどう捉えているだろうか？

AIやロボット技術等の進化によって私たちの生活が豊かになるという捉え方もある一方、人間の職が奪われるというような悲観的な捉え方もあるだろう。私自身はテクノロジーの力をどう使うかという私たちの選択次第で、明るい未来を築いていけると希望を持って捉えている。

もとより私はテクノロジーの力をいかに有効活用できるかという思考だったが、その思考や行動が加速したのは、2013年にALSを発症してからの体験が大きく影響している。テクノロジーの力がただ便利なものから、生きていく上で必要不可欠なものになったからだ。身体を動かす運動神経だけが徐々に衰え手足を動かす自由を奪われたことで、電動車椅子で移動し、視線入力でこの文章を書いている。そして肉声を失った代わりに、昔の自分の声を元に生成した音声合成で発話している。今この瞬間の呼吸さえも人工呼吸器がサポートしているのだ。

このように日常生活のありとあらゆる場面でテクノロジーを身に纏って生活をしていると、身体の補完にとどまらず拡張していける可能性を感じずにはいられない。テクノロジーは個人の身体のリミッター拡張のみならず、さまざまな障がいの垣根を越えた体験の拡張まで実現可能にすると考えている。

そんな光景を創り出したくて、2021年12月にMOVE FES.2021を開催した。私が主催するALS啓発のた

■ 武藤 将胤
一般社団法人 WITH ALS 代表理事

難病 ALS と闘病を続けながら、一般社団法人 WITH ALS 代表理事、COMMUNICATION CREATOR、EYE VDJ と多彩なパーソナリティで数多くのプロジェクトを手掛けている。過去には広告会社・博報堂にて、さまざまなコミュニケーションプラン立案に従事。2013 年 26 歳のときに ALS を発症。世界中に ALS の認知・理解を高めるため「WITH ALS」を立ち上げ、現在は視線入力と自身の発想でさまざまなアーティストやテクノロジストとコラボレーションし、作品制作やコンテンツ開発に挑んでいる。



めの音楽フェスだ。賛同してくれた素晴らしいアーティストとともに、私も EYE VDJ MASA というアーティスト名で視線入力による音楽と映像のライブパフォーマンスを行った。この挑戦は 2016 年から続けている活動で、視線入力で電子機器をコントロールするアプリケーションから開発し、年々改良を繰り返してきた。今ではオリジナル楽曲を制作しリリースもしている。また、従来 DJ と VJ は別々のプレイヤーが担当することが一般的だったが、今ではそれを視線で同時にプレーしている自分がある。これは健常者時代には想像もできなかった進化だ。

紛れもなくテクノロジーの力で身体の補完を超えて、拡張し始めているのだ。

また今回は、音を振動と光に変換するデバイス Ontenna を活用することで、耳の不自由な方や寝たきりの仲間にも、配信で臨場感のあるライブをお楽しみいただいた。そして会場ではデフダンサーの仲間やお客様全員に Ontenna を身につけていただき、身体全体で音楽を楽しんでもらう設計をした。耳の不自由な仲間の世界を想像しながら楽曲の一つひとつに、振動と光のタイミングや強弱、色を視線入力でプログラミングしたのだ。まさにテクノロジーの力で障がいの垣根を越えて、新たな拡張体験が作れた瞬間だった。

私はこれからもテクノロジーとともに、身体の補完を超えて拡張した未来を社会に提案していく。誰もが自分らしく挑戦できる BORDERLESS な社会を目指して。